

慣用句における文化的要素の受容の問題

イーゴリ・ボトーフ

先日、ブリヤート国立大学の日本語講座で日本語を学ぶ学生から質問を受け、久しぶりに非常に戸惑った。その質問を日本語に訳すと、「一回死んだ人が旅を続けることによってありうる？」という意味になる。その学生が翻訳した教科書の例文を見たところ、このあまりにも面白い質問の謎が解けた。彼は、「京都までの予定だったが、足を延ばして神戸まで行ってきた」という例文を翻訳した際、「足を延ばす」という文を日本語の慣用句として認識せずに直訳してしまった。ロシア語にも、「足を延ばす」という慣用句があるのだが、その慣用句はまさに「死ぬ」という意味なのである。

また、ロシア語を学ぶ日本人学生からの質問に困る、という逆のパターンの経験もある。「ロシア人にとって『人を壁の前に立たせる』という行為は、そんなに恐ろしい意味を持つのか」という質問を受けた私は、先ず質問のきつかけとなった資料を調べてみた。今回も誤訳の原因は慣用句の不正確な認識にあった。一般のロシア人は「壁の前に立たせる」という慣用句を「射殺する」の意味で自然に理解するが、ロシア語を学び始めたばかりの学生はこの慣用句を文字通りの意味に解釈してしまったと考えられる。

以上の二つの実例は、外国語における慣用句の正確な理解の難しさを物語る。慣用句は、その国の文化、その国民の発想法を如実に反映し、日常生活と密接な関係を持っている。これら

は、主として国民に広く知られた人物、あるいは、全く無名の人物によるあざやかでの確な表現に由来し、慣用化されたその表現には独特な民族性が付与されている。同じ物、同じ動作、同じ性能、同じ考えを表す場合でも、語彙的な手段が言語によって異なっている。この独特な民族性こそが外国語の慣用句の正確な理解を困難にしている。

ある現実の現象が一つの言語の中で、慣用句的な意味を持つとしても、他の言語において、必ずしも慣用句になるとは限らない。たとえば、日本語の「青田を買う」という慣用句で表される「企業が正規に採用試験の期日より前に、内々に学生と入社の契約をする」という社会的な現象は日本独自のものであり、ロシアの社会で同じ現象は見られない。しかも、「青田の時期に収穫量を見積もり、先物買いをする」という米の購入方法自体も他国に見られない、日本独特の習慣であると考えられるので、ロシア語には同じ意味を表す慣用句が誕生しなかった。このような慣用句の翻訳も大いに日本語学習者を悩ませているに違いない。

現実の認識も民族によってそれぞれで、いずれの言語にも独特な象徴的現象の体系が存在する。この現象は慣用句においても表われる。「as strong as a horse」のように、イギリス人にとってはウマが「健康」の形象であるのに対し、ロシア人にとっては、「雄牛のように丈夫である」という慣用句のように、ウシが「健康」の形象となる。また日本語ではそのウシが、「牛の歩み」のように、歩みの遅いことの形象であるのに対し、ロシア語では、「カタツムリのスピード」のように、カタツムリに移動の遅いイメージが与えられている。自然の物体や日用品などのような具体的概念だけではなく、色や重量などを表す抽象的な概念も慣用句の要素となりうる。たとえば日本語では「クチバシが黄色い」のように、黄色は「年が若く、経験不足で未熟である」という意味を表すが、ロシア人はこの意味を表すために緑色を使うだろう。キ

ルギスでは「猫の鼻」が「短さ」の象徴であり、「猫の鼻のように短い」という慣用句が存在する。ところが、ロシア語には「雀の鼻より短い」という慣用句がある。ロシア人が「短さ」について話すときには、「猫の鼻」ではなく「雀の鼻」という比喻を使うことになるだろう。これに対し、日本語で慣用的に用いられるのは「猫の鼻」ではなく「猫の額」であり、「猫の額」が「狭さ」の象徴となる。

慣用句のもう一つの特徴として、慣用句の構成要素の意味からだけでは全体の意味が理解できない表現、すなわち、もとの意味が拡張または転用され、あるいは、比喻的に用いられて固定した表現であることが、多くの言語学者によって指摘されている。つまり、大部分の慣用句の基底には、比喻的なイメージが潜んでいる。このイメージは伝統的な象徴を元にして成立している。しかし、そのイメージは各言語において、独特な比喻の体系をなしているため、その体系の中に占める位置によっては、比喻的なイメージが他言語とまったく違う意味を表すことがあるのである。

また、言語における比喻の体系が読者の理解を困難にしまうことも、十分に考えられる。各言語では歴史的に、それぞれの独特な比喻の体系が形成されており、話者はその体系に従って、適切な比喻表現を選ぶ。「たくさん、多く」の比喻として、ロシア人は「泥のように多い」とか、「池を池にするほど」などと言うが、日本人は「山ほどある」という表現を選ぶだろう。また、日本語にはお金がたくさんあることについて、「唸るほど金を持つ」という慣用句が存在する。

多くの言語には、人間の身体の部分が入った慣用句が数多く見られる。日本語とロシア語の語彙の統計的な調査によると、人間の身体による慣用句は、日本語からは一〇八六句、ロシア

語からは九六〇句を抽出することができる。その内、翻訳時に比喩が一致する慣用句は四七句のみである。また、日本語とロシア語における慣用句の質的側面を分析した結果、ロシア語には腕、腰、尻、脛、睫に関わる慣用句が見られないことが明らかになった。その原因は人間の身体に対する日本人とロシア人の考え方の違いにあると考えられる。

具体的な例を挙げると、日本人は「腰」を身体を中心として見ているため、日本語には腰に関わる慣用句が多く存在する。一方、ロシア人にとっては、「腰」より「背中」の方が大事なので、「勝つ」という意味の「背中を折る」、「責任を持つ」という意味の「背中の上に置く」、「最も大事なこと」という意味の「体の背中」などのような慣用句を用いる。「肝」に対する考え方も異なっている。日本語では「肝」が「勇氣」、「度胸」、「雄々しさ」を意味する。しかし、ロシア人は、「肝」に好ましくないイメージを持っている。それが「心底から嫌う」という意味の「全ての肝で嫌う」、「ひどくイライラさせる」という意味の「肝の中に入って人を困らせる」などのような慣用句として現れる。

また、ロシア人と日本人の身体の動作はそれぞれ独特な意味を持つことが、広く知られている。たとえば、自分のことを強調するとき、日本人は鼻先を指さすが、ロシア人は同じ意味で鼻先ではなく、胸のあたりを指さす。さらに、相手の不愉快な気持ちを招く身体の動作もある。日本人は相手を「こっちへ来い」と呼び出すときに、手先を上下に振る。しかし、ロシアではこのような動作は犬や猫などのペットを呼び出すときに使うことが多い。このような人間の簡単な動作は、「頭を掻く」、「手をあげる」や「舌を出す」などのような慣用句を生み出してきた。しかし、一見簡単に見える慣用句の直訳は、非常に大きな誤解を招いてしまう。たとえば、ロシア人は日本語の「首をひねる」という慣用句の直訳を耳にしたら、「考え込む、納

得しかねて思案する」意味ではなく、「ぼーっとする」という、まったく違う意味で解釈してしまう恐れがある。

我々は日常生活の中で、自国語の馴染み深い慣用句を深く考えず、すぐ口に出すことがよくあると思うが、異文化の代表者と話し合う場合、たまには相手の文化の特徴を思い出した方がよいのではないだろうか？

（ブリヤート国立大学准教授／国際日本文化研究センター元外国人研究員）